

●二人で味わう古典和歌(38)

草若み常陸ひたちの浦のいかが崎いかにあひ見む田子たごの浦波

近江の君

『源氏物語』『常夏』より。近江の君は内大臣(かつての頭の中将)の娘。この年の春のこと、内大臣が奇妙な夢を見たとかで、その夢判断をさせたところ、知らぬところで育っている落とし胤なつの娘を探し出し世話をせよ、とのお告げがあったという。元々あちこちにたくさんのお子を儲けている内大臣だったが、噂を聞きつけた女の「自分こそは」というあやしげな自己申告を受け、なんとか立派で高貴な娘に育てるべく、引き取ることとなった。

この近江の君、顔立ちが父親に似て悪くなく愛嬌があったらしい。しかし、育ちの方があまりよろしくなく、大声で早口であけすけで……。今までと違う環境を心配する父に対しても「宮仕えなんて大袈裟に考えるから、身の置き所もない感じがするだけ。たとえ便壺掃除だって平気平気」と。いつも一言多い女君なのである。



引き取ってみたはいいけれど、早々に後悔の念が兆し始めた勝手な内大臣は、自分のところでは持て余すというので娘の弘徽殿女御の元で修行させよう(押しつけよう)と思いつつ。近江の君にそのことを伝えると、挨拶代わりに女御に贈ったのが冒頭の一首。歌意は「まだ萌えはじめたばかりの草の未熟さに、あの常陸の浦のいかが崎ではございませぬが、いかにしてお目にかかることができましょうか、田子の浦の波のような私は」。常陸の浦(茨城)。「いかが崎(滋賀か大阪)」「田子の浦(静岡)」。全国歌枕詰め放題である。さらにこれを渡すのによりによって便壺掃除の童を使いとしてしまう天然ぶり。これを受け取った女御は呆れながら、そばにいた中納言の君に、こちらもまた歌枕をふんだんに盛り込んだ返歌をさせたという。

亡き夕顔の娘で、源氏に引き取られ素晴らしく成長する玉鬘(実は内大臣の娘)を引き立たせる笑われ役としての近江の君。思い悩み、涙に明け暮れるばかりの登場人物たちのなかで彼女の登場する巻は明るい。紫式部はおそらく彼女が好きだったのだと思う。

(小島なお)